

2012年10月15日



## お愛想目つき

GNH研究所 代表幹事 平山修一

私が住んでいるタイの良さの一つに、穏やかな人の雰囲気があります。特に職場や観光施設、ホテルなど場所を問わず、人々の屈託無い笑顔と優しい目つきであふれています。

とある南アジアの国に行ったときの事です。そこにいる人の顔の表情が皆険しく、なんとなく雰囲気が重苦しく感じたことがあります。実際、人は生きるのに必死で他人を押しつけて…これでは笑っている場合ではありません。

今の日本の街中では笑顔の人をあまり見かけません。電車の中、デパート、公共施設、会社の中ですら精気を失った目つきの人や厳しい目つきの人が目につきます。文化の違いもあるかとは思いますが、まるで笑顔を禁止しているようです。

江戸時代の商人にはお愛想目つきという言葉があったそうです。言葉だけではなく目つきにも感謝を込めて対応をなささい、それがお店のひいては世の中の雰囲気を作ります、というものです。

江戸の人口の3分の2は男性だったそうです。昔の侍は単身赴任が多く、出身地も違えば風習や言葉も違う、確かにちょっとした事でトラブルになりやすく、ぎすぎすしがちだったのではないのでしょうか。そうした侍達が作り出す雰囲気を少しでも緩和するために江戸商人たちは積極的に作り笑顔をしていたのでしょ

う。タイは街中でも会社でも多くの場所が笑顔であふれています。これらの多くは作り笑顔です。でも、作り笑顔とはいえ、目もしっかりと笑っているとなぜか心地よさを感じます。

笑顔は雰囲気を明るくしてくれます。今日からでも積極的に心をこめて【作り笑顔】をしてみても如何でしょうか。また最初は作り笑顔でも段々と気持ちが晴れやかになり本当の笑顔になる事もあります。

こうした一人ひとりの小さな試みによって、社会の何かが大きく変わる。これもささやかながらGNHの実践の一つのやり方かもしれませんね。

## コラム① 近代化とブータンの国民の幸福を考えた日本技術者の新しい視点： 大学学術交流事始め

白井一

日本は1968年度にGNPが50兆円を突破しました。この時西独を抜いて世界2位の経済大国になりました。その後2011年までの42年間その地位にありましたが、昨年、中国にその地位を譲りました。2011年の名目GDP（GNPとほぼ同じ）は468兆円（実質GDP：506兆円）になりました。（実質GDPと名目GDPの違いは、<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/650287.html> 参照）

当方は1969年3月に都内の工業大学の機械科を卒業しました。学生時代には「熊本水俣病」や、日本で最初の公害病といわれた、「イタイイタイ病」が明らかになりました。イタイイタイ病は、岐阜県三井金属鉱業神岡事業所の「神岡鉱山」で、鉱山製錬に伴う未処理廃水を神通川に垂れ流したことが起因し、神通川下流地域の富山県で発生した鉱害です。加えて、新潟水俣病、四日市喘息の四大公害病や、新幹線の騒音公害が大きな社会問題になっていました。

この時期の1970年5月の朝日新聞に「くたばれGNP」と銘打った記事が連載されました。「公害」、「環境破壊」、「サラリーマンの過労死」、「地方の過疎化」など、GNPの増大と高度経済成長に伴う負の面がニュースになり始めました。つまり日本の近代化や工業化の弊害に焦点が当たった時期です。この42年間に10倍に上る経済力の成長、つまりGNPの増大を続けた日本人は、物質的にも実際の生活面でも世界のトップレベルの豊かさを獲得しました。幸せ感については兎も角、同時にうつ病や身体に不安を感じる患者が増え、経済破綻者も含めた自殺者数が十数年にわたり3万人を超えるなど、我々の世代は、近代化の弊害をつぶさに見てきた最初の世代です。

ブータンの第4代国王は1976年に、「ブータンではGNH（国民総幸福量）はGDP（国内総生産）より大切」と述べており、今日ではその慧眼に世界中が敬服しています。同じ様に日本の技術者の卵も1960年代に西欧型近代化の危機を感じ、1970年には「くたばれGNP」を読み、その行く末を模索しながら、日常的には公害などの多くの問題を技術力で解決してきました。

2003年、その日本の技術屋である当方も、ブータンの第3次道路整備機材拡充計画のJICA調査員として当国の道路局を訪問し、ブータンの道路事情を調査することから技術支援が始まりました。国土交通省の開発途上国でのNPO、NGO活動支援計画の一環で5年にわたりブータンの道路整備支援を行い、結果として首都ティンプーの道路は見違えるほど立派になりました。

た。その過程でブータンのGNH思想を身近に感じると同時に、それは「くたばれGNP」の考え方の先に続く、日本人の誰もが認める人類が生き延びるための思想だとの思いに至りました。日本の現場では概念としてのGNHはなかったとしても、それに似た理念は古くから共有していたように思います。一例が二宮尊徳の報徳思想の①至誠・②勤労・③分度・④推譲です（詳細：報徳思想/検索）。

### ブータン王立大学と日本の工業大学の学術交流開始

ご存じの様にブータンには一つの王立大学と称する本部があり、10のカレッジや大学で構成されています。しかし近代化を担う工業大学に学士を輩出する機械工学科がありません。機械工学科や新しい学科を創設するために、平成24年8月9日から18日まで、日本の工業大学の学長はじめとする学術交流調査団がブータンに入り、東ブータンのDawatangにあるJigme Namgyel PolytechnicとPhuentsholingのCollege of Science and Technologyで学術交流の具体策を話し合ってきました。

幸い関係者間で学術交流開始の仮調印も済みました。間もなく、近代化を成し遂げ、世界に類を見ない発展を遂げた日本の工業大学と、「西欧化ではない近代化を目指したい」とするブータンの大学間で機械工学科を拡充し、機械工学士を送り出す学術交流が開始する運びです。ブータンの道路整備技術支援を進めてきたNPO法人国際建設機械専門家協議会は、本件ではその橋渡しをしております。

写真：首都ティンプーのモダンなショッピングセンター



白井一（しらいはじめ）

GNH研究所 会員

NPO法人国際建設機械専門家協議会代表理事

## コラム② GNHでないUn-GNHのケース

高田忠典

“100年に及ぶ植民地からの完全独立を果たした政府は、国際社会に向け非同盟・中立外交政策を表明。国内の右派左派を問わず諸政党を束ねつつ、仏教の公平な理念に基づいて民主化された王制を維持しながら、政府主導による計画経済政策をとることで国家の発展をおしすすめた。”

これは当時「東洋のパリ」と詠われた1950年代頃の“カンボジア”の政治状況です。GNHの国ブータンを彷彿させる幸福な国を連想させます。しかし時代は残酷にも、この国をアジア史上最悪の事態へと突き動かしました。60年代後半になると経済状況の悪化に加え、隣国のベトナム戦争へと巻き込まれ、遂には1975年、ポルポト率いる共産主義勢力クメール・ルージュの台頭に至ります。

ポルポト政権下では、排外的な民族主義と、急進的な共産主義、農本主義に裏打ちされた急進的な政策が進められました。クメール・ルージュの政治思想以外の教育、私有財産、通貨、宗教、文化、伝統的社会規範のすべてが否定され、僧侶、教師、医者などの知識人全てが「革命に参加しなかった敵」として迫害を受けました。当時の人口およそ800万人のうち、100万人以上が死に追いやられたとされています。ポルポト政権は僅か4年で崩壊しましたが、その後もカンボジアの内戦状態は25年に渡り続きました。

今世紀に入り、安定を取り戻した政権では、内戦が生み出した貧困削減策を目的とした（「GNH 4つの柱」を連想させる）「レクタングュラー（四辺形）戦略」が発表されました。その内容は（1）農業セクターの強化（2）インフラの復興と建設（3）民間セクター開発と雇用創出（4）キャパシティビルディングと人材開発、の4分野の開発を四辺とし、囲まれた中には「グッドガバナンス」（汚職撤廃、司法・行政・軍の改革）が配されています。

この計画戦略は、それ以前の幾つかの開発計画を基に主要な要素を抽出されて作られています。その中のひとつ「第一次カンボジア社会・経済計画」では（1）持続的な経済成長と公平な所得配分（2）社会開発の促進と文化の促進（3）持続的な天然資源管

理と環境問題への対応、という目標が掲げられていました。「レクタングュラー戦略」では、貧困削減のための経済復興に緊急性が求められていたためか、配分、文化、持続可能性といったキーワードは大きく反映されていません。開発戦略開始から10年が経過した今、カンボジアは東南アジアの中で最も政治治安が良い国とされています。また経済成長は著しく2004年から2007年には毎年約10%の成長率がありました。しかし、その一方で、政府の汚職、貧富の差の拡大、国民のモラル低下、といった社会問題は拡大しています。

専門家によれば、政治・経済権限が政権トップに集中するという、紛争後の社会に見られる体制が、未だ継続されている点や、長年に及ぶ内戦が、伝統的な社会規範や文化・宗教を柱とする寺院を中心とした村社会における連帯感と信頼が破壊された点、すなわち「社会資本」が消失された事、などを原因として挙げています。

今回は、時代に翻弄されGNHでない事が起きた事例を紹介させていただきました。現在、私はそのカンボジアで、全国の地方で活躍するクルクメールと呼ばれる伝統医療師達と共に、GNH『4つの柱』を目標とした協会の活動を応援する事業に携わっています。今後その事例についてもHPのコラム等で紹介させて頂きたいと思います。

写真：世界遺産プレアピヒア寺院遺跡／カンボジア



高田 忠典（たかだ ただのり）

GNH研究所 研究員

伝統医療普及事業／日本財団専門家

CaTMO (カンボジア伝統医療機構)



よみうりカルチャースクール川口における講座の様子。

## よみうりカルチャースクール講座実施報告

文責 藤原整 (GNH研究所 研究員)

GNH研究所の研究員が、去る7月から9月にかけて、よみうりカルチャースクール 川口センターに於いて、「ブータンのGNH（国民総幸福）を学ぶ—幸福の国ブータン」と題する講座を開きました。本講座は、昨秋、国王夫婦が来日したことで注目を浴びたブータンについて、GNHというユニークな取り組みを中心に、ブータンの人々の暮らしや文化、観光事情などを、写真やスライドを使って紹介し、GNHに関心を深めていただくことを目的として開催したものです。全6回の講座が全て終了しましたので、以下の通り報告させていただきます。

### 7月14日 (担当：齊藤光弘、藤原整)

初回は、「ブータンと国民総幸福」と題して、導入編をお話しました。受講者は、少人数ではありますが、ブータンへ何度も渡航経験のある方から、お仕事の関係で一度だけ訪れたことのある方、未渡航の方まで、幅広い方々にお集まりいただきました。

まずは、みなさんのブータンへの興味関心などを確認しながら、和やかな対話形式で進めていきました。受講者の方々からは、「(ご主人の急逝により)死生観が大きく変化した。死生観と幸福観について学びたい」「国王の被災地訪問に感銘を受けた。精神面の豊かさはどういふことか知りたい」といったご意見、ご要望が挙げられました。

みなさん、熱心に耳を傾けてくださり、終了後、受講者の一人からは、「ブータンの知識がほとんど

ない自分が参加していても違和感なく、最後まで興味を持って聞く事が出来て良かった」という感想を頂くことができました。

### 7月28日 (担当：齊藤光弘)

初回に引き続き齊藤氏が担当し、「日本とブータンを比較する」と題して、日本人とブータン人の幸福観の違い等を紹介しました。

「経済的な豊かさが必ずしも幸福感につながるとは限らない」という調査結果を踏まえた上で、日本人とブータン人が、それぞれのどのような要素を幸せを感じる際に重視しているか、といった事例を取り上げ、両者の共通点や相違点について説明しました。また、「あなたの幸福度は何点ですか?」「あなたにとって、幸せを構成する要素は何ですか?」といった、参加型のミニワークを通じて、普段は考える機会の少ない「幸せ」について、改めてご自身の価値観を確認していただくことができました。

### 8月11日 (担当：山本けいこ)

第3回は、山本さんによる「ブータンの伝統的な暮らし」。ブータンそのものを「視覚・食覚・触覚」で感じて戴く回となりました。

まず、大型横長写真(千葉県立博物館での民家再現展示風景)を元に、ブータンの衣食住を中心とした一般家庭の生活状況を説明しました。特に、「衣」については、民族衣装着用等が義務付けられ

ていることを説明した上で、ゴ・キラの他にドヤッパ（南の国境の町プンツォリン付近に住む人々）・ラヤッパ（北方のチベット国境に近いラヤ村に住む人々）・ブクパ（ブータン東部のメラ・サクテン地域に住む人々）の衣装について、それぞれ写真を紹介し、周辺地域との類似性等の理解を深めていただきました。

また、ダショー・ニシオカが蒐集した貫頭衣、第3代国王から東郷文彦氏に下賜されたイラクサ布の実物をご覧頂くとともに、お二人の功績についても言及しました。最後に、ブータンのお菓子「カブセ」を試食していただき、閉会となりました。

### 8月25日（担当：須藤伸）

「ブータンの人々の考えを知る」と題した第4回では、在日ブータン人を招き、講話（日本語）を聞くとともに、ブータン人の考え方や暮らし、幸福感について理解を深めていただくことを目標としました。

ブータンで長年観光ガイドをしていたツェリン・ノルブ氏による講話の中では、ご本人の生い立ちにはじまり、暮らしてきた環境や人々の考え方、そしてブータンの魅力や観光スポットの紹介、さらに国王やGNHという考えについてどのように感じているか、といった内容に至るまで、地元の日を通して味わい深いお話を聞いていただくことができました。その後、須藤氏の進行の下、参加者からの質疑応答を中心とした座談会を開き、和やかな雰囲気での会を終えることができました。

また、前回披露した、女性用の民族衣装であるキラの実物に続いて、男性用の民族衣装であるゴの実物に触れていただきました。

### 9月8日（担当：藤原整）

第5回は「最新ブータン事情」について。この回では、1999年にブータン国内でテレビとインターネットが一般に解禁され、情報化がスタートしたことに触れ、その後のブータン社会の変化を紹介しました。

はじめに、この半年で地元メディアに取り上げられたさまざまなトピックス（インドルピー枯渇、国内線運航一時休止、NO CAR DAY等）を拾い上げ、現代ブータンにおける社会問題について紹介しました。次に、情報化過程の特殊性（テレビとイン

ターネットが同時に解禁等）を説明した上で、フィールド調査から得られた知見等を紹介しました。

ブータンでも、「官公庁でのFacebook禁止」「デジタルネイティブ世代の子育ての難しさ」等、情報化の弊害が取り沙汰されることが増えてきましたが、情報化による功罪両側面を鑑みた上で、最後に、「先進国の良いトコ取りは本当に可能なのか？」という問題提起を行いました。

### 9月29日（担当：平山雄大）

当初、最終回はワークショップ形式による開催を予定していましたが、受講者の方からの要望もあり、急遽、平山氏による「第4代国王とGNH」と題した講座を実施しました。

ブータンにおけるGNHの歴史を紐解いた上で、第4代国王がどのようにGNHを構想したのか、という点について、その両親である第3代国王・王妃の考えや国際感覚、開発をインドに依存する特殊な状況からの影響を指摘しました。また併せて、GNHがどのように国際的認知を得ていったのか、についても言及しました。

さらに、第4代国王が、1970年代から2000年代という長きに渡る在位中に行ったスピーチを読み解き、国王が一貫して、「経済的自立の達成」と「政府と国民の協働」の必要性を説いていることを紹介しました。

### 全6回の講座を終えて

担当した研究員の中には、こうしたカルチャースクールでの講師経験が無い者もいましたが、受講者のみなさんも大変熱心に聞いてくださったおかげで、滞りなく進めることができました。ご協力いただいた皆様には、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

今回、このような機会を得たことは、世の中で、GNHのような「幸福」を求める思想へのニーズが高まっていることの表れのようにも感じます。ブータンや、GNHについて、正しい知識を多くの方々に知っていただくこと、それがGNH研究所の一つの役割ではないかと、強く実感した三ヶ月間でした。（藤原）

本講座実施報告は、各回の担当者ご自身による振り返り、および、研究員である小島有紀子さんの記したレポートを元に、編集・再構成したものです。

## 掲示板

● GNH研究所研究員・斉藤光弘氏が、相模原市立総合学習センターに於いて、「ブータンの国民総幸福量について学びながら、自分にとっての幸せを再確認すること」をテーマに、講座を開講します。

<日時> 2013年2月9日(土) 14:00~16:00

<会場> 相模原市立総合学習センター(神奈川県相模原市中央3-12-10 最寄駅JR横浜線相模原駅)

※申込方法等詳細は、後日、同センターのHPに掲載予定。

● 日本ブータン友好協会(Tel: 03-3945-3396)が主催者となり、「変わるブータン、変わらぬブータン — GNHへの挑戦 —」をテーマとしたシンポジウムが開催されます。GNH研究所のアドバイザーでもある草郷孝好氏(関西大学教授)が基調講演を行うほか、パネリストとして、中島民樹氏(ティンプー市役所環境課勤務)、西田文信氏(秋田大学准教授)、脇田道子氏(慶應義塾大学社会学研究科博士課程)が登壇を予定しています。

<日時> 2012年12月16日(日) 13:00 開場

<場所> JICA研究所 2階 国際会議場

<定員> 200人(先着)

<会費> 本会議: 日・ブ協会会員、学生 1,000円(一般 1,500円)、懇親会: 日・ブ協会会員、学生 4,000円(一般 5,000円)

以下のいずれかの方法を用いて、「氏名」「日・ブ友好協会会員、非会員の別」「会社名・学校名」「職業」「連絡先(電話番号・メールアドレス)および「懇親会の出欠」を明記の上、お申込下さい。

【メール】 [sympo@japan-bhutan.org](mailto:sympo@japan-bhutan.org)

【FAX】 03-3945-3396

## 編集後記

● ニュースレター第3号をお届けします。10月も半ばになり、私の住む東京も、ようやく秋めいてきました。みなさまのお住まいの地域はいかがでしょう？ 季節の変わり目、お風邪など召されぬようお気をつけ下さい。(藤原整)



### GNH研究所 ニュースレター 第3号

発行元 GNH研究所(代表幹事: 平山修一)

<http://www.gnh-study.com/>

発行日 2012年10月15日

編集者 高田忠典(GNH研究所 研究員)、藤原整(GNH研究所 研究員)

著者 平山修一(p.1)、白井一(p.2)、高田忠典(p.3)、藤原整(p.4,5)

写真 瀬畑陽介(p.1,6)、白井一(p.2)、高田忠典(p.3)、斉藤光弘(p.4)

※全ての著作物および写真の著作権は、上記の方々に帰属しています。